

春秋時代、孔子は弟子を取り、家で学校を開きました。名声は遠くまで聞こえ、魯の定公の注目をひきました。定公は、度々孔子を宮殿に招き、話を聞きました。

ある時、魯の国の有力者である季孫氏の執事陽虎が、孔子に会いたいと訪ねて来ましたが、孔子は忙しくて面会の時間が取れないと言われ、会うことが出来ませんでした。陽虎は気にせず、又何日かして孔子を訪問しました。今回もまた孔子には面会出来ませんでした。お土産として、孔子に仔豚の丸焼きを贈って帰って来ました。陽虎は、孔子が礼儀には厳格な人で、“礼は往来を尊ぶ”ということを知っていて、必ずお返しがあると考えたのです。果たして、後日、孔子は陽虎の家を返礼訪問したのです。



言葉の意味：礼＝礼儀；尚＝尊ぶ、大切に。礼儀としては、訪問を受けたら、お返しに訪問しなければならない。現代は、何かしてもらったら、その相手には、同じようにしてお返しをするのが礼儀だ、という意味。

使用例：明明が絵を贈ってくれたので、礼儀として、自分の一番好きなおもちゃをあげた。



お話はこれだけです。儒教の特色である礼儀を重んじることを教えるのに、このお話を持って来たのは面白いですね。この年齢の子供たちに、背後の歴史を教えるかどうかは不明ですが、ここではちょっと覗いてみましょう。

実は、この話の中の、孔子が会えないところで「借故」という言葉を使っています。中国語では、「口実を作って」という意味があります。孔子が口実を設けて面会を避けた陽虎とは、どういう人でしょうか。

孔子の生きた時代、魯の国では、魯の王様よりも三桓と言われる、3人の大臣の家が力を持っていました。

この三桓というのは、魯の15代桓公の3人の子供から起こった家で、代々国王の補佐役を務めているのですが、孔子の生きた時代になると、三家とも、その権勢は魯公よりも強くなりました。

孔子が理想とする、周王朝から伝わる礼は、人々が分を弁えて行動することを教えているのですが、三桓家は皆、宴会や楽団の規模で王家をしのぎ、その分を超えた行いを、孔子は苦々しく思っていました。

この三桓の筆頭が季孫家で、陽虎はその季孫氏の支配人として働いていたのですから、孔子が面会したくないと思うのは尤もです。

しかしこの後に面白い話があります。断片的な話ですが、一時期、孔子が陽虎に協力する気になったのです。実現はしませんでした。陽虎はB.C.502年に三桓の家臣たちを束ねて、三桓家に反旗を掲げて失敗し、追放されています。

この二つの話から、私は、陽虎のクーデターは、三桓家を討

って、魯の昭公の支配権を回復しようとしたのだと考えてみました。そうすれば、孔子が協力する気になることも頷けます。陽虎は、放浪の果てに、周囲の反対を押し切って召し抱えてくれた晋の趙鞅のために死力を尽くしたという話も、彼が礼を重んじる人だとの傍証になるのでは、と考えます。

でも、これは私の勝手な想像です。一般的な陽虎の評価は、単なる野心家。クーデターも自分の権勢欲の為だけの単なる下克上だというのが定説です。

ちょっとした歴史の隙間に、想像力を挟んでみるのは、素人が歴史を眺める時の楽しみです。中国の古代史には、こんな隙間が沢山あります。

因みに、この陽虎、容貌が孔子とよく似ていて、放浪中に一度、孔子が命の危険を感じたことがあるのは、陽虎に恨みを持つ人々が、陽虎と間違えて襲ったためだとの話が伝わっています。



満柏氏画